

# 海外での調査

明治30年代に入ると、修学旅行は海外でも実施されるようになった。最初に海外を訪れたのは、のちに東京高等商業学校・東京商科大学で教授を務めた堀光亀(1875～1940)である。彼は明治28(1895)年の下関条約によって日本の領土となった台湾を明治31年に訪問し、2週間にわたって調査を行った。自筆の報告書は失われてしまったが、製茶業を論じた巻之1が『高等商業学校同窓会会誌』第6号に掲載され、今日まで伝わっている。



海外での調査は日露戦争を契機に急増した。海外に赴いた修学旅行生の正確な数は定かではないが、明治38(1905)年以降に修学旅行に選抜された学生のうち、およそ半数が海外での調査に従事した。同年以前に海外で調査を行ったことが判明しているのは上述の堀を含めてわずか2名であるから、日露戦争後の変化は明白である。学生たちの調査先は、台湾、朝鮮半島、中国東北部、長江流域、さらには香港やフィリピンにまで及んだ。

長沼四郎『揚子江流域地方ニ於ケル日独商品販路ノ状況』

序文によると、現地での調査期間は「八旬」(=80日)であった。通訳を介して中国人商人・ドイツ人商人に接触を試みたが情報を得られず、少数の日本人商人からの情報に頼らざるを得なかったという。

すでに「視察から調査へ」の項で指摘したように、修学旅行の調査テーマはその時々での経済的・社会的課題に即して設定された。海外での調査は、大陸への経済的進出という日露戦争後の日本が抱えた課題に応えるべく実施されたのだろう。

桶谷友助『大連港ノ経営』より「大連埠頭計画図」(部分)

学校から命じられたのは南満州鉄道株式会社の調査であったが、課題が大きすぎると判断して自分でテーマを大連港の経営に再設定した。

